

『ジェイン・エア』とフェミニズム —— フェミニズムで読む『ジェイン・エア』——

杉村 藍

Jane Eyre and Feminist Criticism: Reading Jane Eyre from a Feminist Critical Viewpoint

Ai SUGIMURA

I はじめに

出版から150年を経た *Jane Eyre* (1847) は、この間多くの人々に読まれ、また批評され研究されてきた。その読み方、研究のしかたは個人によって、批評家間、研究者間で異なるが、それと同時に多かれ少なかれ時代の影響を受けたものでもあった。これは *Jane Eyre* の批評の歴史をふり返ってみると明確にわかる。

これまで研究のために時代とともにさまざまな批評方法が採用されてきたが、現在 *Jane Eyre* 研究においてその主流をなしているのはフェミニズム批評である。フェミニズム批評そのものは、今世紀後半、女性解放運動の興隆と相俟って文学研究において盛んに用いられるようになった。*Jane Eyre* のフェミニズム研究もそうした流れの一つであったが、しかしこの手法は単なる時代の影響に留まらず、*Jane Eyre* 批評の歴史のなかでも一時代を画するほどに浸透し多用されるものとなった。なぜ *Jane Eyre* 研究においてフェミニズムがこれほど多用されたのか。また、*Jane Eyre* はどのような点がフェミニズム小説であるのか、あるいはあり得ないのか。小論では *Jane Eyre* のフェミニズム論を通してフェミニズム批評の成果とその限界を考えてみたい。

II フェミニズム小説としての *Jane Eyre*

Jane Eyre 研究にフェミニズム批評が多用された理由の幾つかは容易に挙げることができる。一つには作者が Charlotte Brontë (1816-55) という女性であったこと、また小説の主人公も女性であり、その女性主人公の生き方に焦点を当てた作品であったことである。しかし Charlotte Brontë 以前にも多くの女性作家が女性を主人公にした作品を発表しているので、無論これだけでは充分な説得的理由とはならない。

Jane Eyre がフェミニズム小説として人々を惹きつけた大きな理由は、この作品がそれまでの小説のヒロインのステレオタイプを打破して新しいヒロインを創造したことにある。作品の第16章でジェイン自身が彼女の自画像に添えようとした“Portrait of a Governess, disconnected, poor, and plain”という言葉が示すとおり、彼女は身寄りもなく貧しく、容姿の美しさにも恵まれぬ、家庭教師として自活することを余儀なくされている女性である。この Jane の自己定義の言葉のなかに、従来の小説のヒロインたちを彩っていた華やかな要素や魅力はない。社会

的地位・身分や容姿の美しさは、その社会のなかで形づくられ受け入れられている価値観や美意識を基準として評価される。そしてそうした価値観は、父権制社会であったヴィクトリア朝においては当然男性が中心となって形成されたものであった。女性の美しさに関しても、やはり彼女らを見る男性の側の視線が重要であったことはいうまでもない。ところが Jane はこのような男性によって形づくられた価値基準には当てはまらない女性であった。彼女はむしろ、当時の基準からみると「女性らしからぬ」女性であった。有名な Elizabeth Rigby (Lady Eastlake, 1809-93) の *Jane Eyre* 批評にもあるように、Jane はヴィクトリア朝の女性観を逸脱した存在であったのである。

Jane Eyre, in spite of some grand things about her, is a being totally uncongenial to our feelings from beginning to end. We acknowledge her firmness — we respect her determination — we feel for her struggles; but, for all that, and setting aside higher considerations, the impression she leaves on our mind is that of a decidedly vulgar-minded woman — one whom we should not care for as an acquaintance, whom we should not seek as a friend, whom we should not desire for a relation, and whom we should scrupulously avoid for a governess.¹

作者 Charlotte Brontë が、当時の価値基準に適った魅力に代るものとしてヒロインに与えたのは、知性や行動力、意志の強さなどであった。この点に関しては先の Rigby でさえ引用文のなかにあるように “We acknowledge her firmness — we respect her determination” としてしぶしぶながらも認めている。しかし意志の堅固さや行動力は、ヴィクトリア朝当時としては女性の美質というよりは男性にあって賞賛される特性であった。この点でも、やはり Jane は当時のヒロインのステレオタイプには当てはまらない。彼女は男性社会の規格に捉われないヒロインであった。このように、社会——そしてその社会の中心を占める男性たち——によって形づくられた価値観から逸脱した女性であったこと、この点がフェミニズム批評家にとっては魅力であったにちがいない。

また、Jane の人物創造に加えて、彼女が社会における女性の立場に関して明確に自分の意見を述べている点も、フェミニストたちを惹きつける大きな要因であった。しかもその意見は「女性も男性と対等である」という、ヴィクトリア朝時代としては非常に斬新なものであった。

Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer; and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex.²

先に述べたヒロインのステレオタイプの打破に関しては、フェミニズムという思想すらまったくもたなかった出版当初の批評家たちも、その新しさに気づき指摘をしていた。³ しかしこ

で挙げた Jane の意見を、両性の平等を説き女性の立場を擁護したのものとして高く評価し得たのは、文学批評においてもフェミニズム思想が徐々に台頭し始めた 1940 年代においてであった。作品のなかで述べられている Jane の主張は、まさにフェミニズムの意図していたものそのものであった。その意味では、これを執筆した Charlotte Brontë は、フェミニズム思想において実に 100 年も時代に先行していたことになる。特にこの時期の *Jane Eyre* は、女性作家 Elizabeth Bowen (1899-1973) や同じく女性小説家 Phyllis Bentley (1894-1977) らによってイギリス文学史上最初のフェミニズム小説として位置づけられるなど、その歴史的な価値も高い評価を受けたのである。⁴

Charlotte がこのように斬新な女性を創造したり女性の立場について主張することができたのは、彼女自身が実生活においてこれらの問題に直面していたためである。ヨークシャーの寒村の司祭一家に生まれた彼女には、自活は現実の問題であった。生活の資を得る必要に迫られながらも、当時の社会では女性が職業をもつことに対して偏見が根強く、中流以上の家庭の女性がレディの身分を失うことなく経済的自立を図ることのできる道は、ただ一つガヴァネスになることだけであった。⁵ 特に Charlotte が *Jane Eyre* を執筆した 1840 年代頃からは、男女の死亡率の相違、海外移住に関する両性間の相違、そして上流および中流階級男性の晩婚の傾向といった理由のために、適齢期の女性の数に見合うだけの適齢期の男性の数が大幅に不足していた。⁶ 従来、夫に扶養してもらうことを前提とし、妻や母として生きる以外の道を考える必要などなかった女性たちが、社会状況の変化により自活しなければならなくなった。彼女たちにとっていかにして生計を立てるかはまさに死活問題であった。Charlotte もこうした問題に直面していた一人であり、結婚やそれにまつわる事柄に関してつねに注意を払っていた。例えば、友人 Ellen Nussey に宛てた次のような手紙が残っている。

Not that it is a crime to marry — or a crime to wish to be married — but it is an imbecility which I reflect with contempt — for women who have neither fortune nor beauty — to make marriage the principal object of their wishes and hopes and the aim of all their actions — not to be able to convince themselves that they are unattractive — and that they had better be quiet and think of other things than wedlock — ⁷

Charlotte は *Jane Eyre* 以外の彼女の小説、*The Professor* (1857) や *Villette* (1853) ではヒロインたちの経済的な自立を、また *Shirley* (1849) でも第 10 章 “Old Maids” で結婚することなく年老いた女性たちの生き方について語るなど、女性と結婚、経済的自立の問題に強い関心をもっていた。例えば *Shirley* のなかでヒロインの一人、Caroline Helstone が、自分は結婚しないとしたら何のために生まれてきたのだらうと自問している場面がある。

“I shall not be married, it appears,” she continued. “I suppose, as Robert does not care for me, I shall never have a husband to love, nor little children to take care of. Till lately I had reckoned securely on the duties and affections of wife and mother to occupy my existence. I considered, somehow, as a matter of course, that I was growing up to the ordinary destiny, and never troubled myself to seek any other; but now, I perceive plainly, I may have been mistaken. Probably I shall be an old maid. I shall live to see Robert married to some one else, some rich lady: I shall never marry.

What was I created for, I wonder? Where is my place in the world?"⁸

しかしこうした問題に直面していた女性は、すでに述べたように Charlotte ばかりではなかったはずである。当時文筆に携わっていた女性の多くが、直接・間接に同じ問題を目のあたりにしていた。そのなかでなぜ Charlotte Brontë の小説がこれほどまでに後世の人々の心をつかんだのであろうか。

Charlotte は社会のなかで苦悩する女性を描いたが、それは、彼女がヴィクトリア朝の構造に知悉し社会的な意識を強くもっていたためではない。むしろその反対で、彼女は非常に個人的な作家——自分自身に意識を集中した作家であったからこそ *Jane Eyre* を創造することができたのではないであろうか。それまでのヒロインのステレオタイプを打ち破る独自性や、ヒロインが作中で述べる意見の斬新さは、彼女が描いたのがまさに自分自身であったからである。

Charlotte 自身はしかし、自分が主人公 *Jane Eyre* であり得るかという問いに対しては否定的な答え方をしている。不器量なヒロインを創造したことに関して彼女自身がどのように述べていたかを、彼女の死亡記事を執筆した Harriet Martineau (1802-76) が、記事のなかで回想している。

'Jane Eyre' was naturally and universally supposed to be Charlotte herself; but she always denied it, calmly, cheerfully, and with the obvious sincerity which characterised all she said. She declared that there was no more ground for the assertion than this. She once told her sisters that they were wrong — even morally wrong — in making their heroines beautiful, as a matter of course. They replied that it was impossible to make a heroine interesting on other terms. Her answer was, 'I will prove to you that you are wrong. I will show you a heroine as small and as plain as myself who shall be as interesting as any of yours.' 'Hence, "Jane Eyre"', said she in telling the anecdote; 'but she is not myself, any further than that'⁹

Charlotte は小柄で不器量であるという点以外、Jane と彼女自身につながるころはないと語り、自分は Jane ではないのだと否定していたという。彼女が語ったことは、確かに彼女が考えていたことであり、決して嘘を言っていたのではないであろう。作家にとって作品の登場人物はあくまでも自分が作り出したもの、自己の経験を踏まえていたとしてもそこに想像力が作用して新たに生み出された創造物となるからである。そのため Charlotte の意識のなかで *Jane Eyre* があくまで自分の創造した人物と位置づけられていても不思議はない。

そしてもう一つ、彼女が Jane と自分自身を切り離して考えていたのは、*Jane Eyre* が Charlotte の分身、彼女自身であったからであろう。Martineau が死亡記事のなかでも述べていたように、*Jane Eyre* は単なる空想によって生まれた人物ではなく、まさしく作者自身が直接語っているという真に迫った迫力をもっている。このことには出版当初から多くの人々が気づいていた。ではなぜ Charlotte はそれを否定したのか。それは、これが事実だったからである。作品の迫力が物語っているように、Charlotte は自分自身の感じていたこと、訴えようとしていたことを *Jane Eyre* を通して紙面にぶつけた。しかし Jane が自分自身であるという意識をもって執筆していたら、出版を目的とした小説のなかでこれほど自己の感情を吐露することはできなかったであろう。Cowan Bridge School での苦しい生活や姉 Maria の死、Constantin Héger へ

の報われなかった恋の苦悩などは、直接自分自身の経験として書き記すにはあまりにも個人的で、そして生々しい体験であった。そのため Charlotte は Jane に仮託することによって始めて自分の真情を表現することができた。それゆえ主人公を自分自身と結びつけることは、Charlotte の意識が許さないことであり、無意識のうちに、自動的に切り離して考えるという仕組みが出来上がっていたのである。しかしこの仕組みがあつてこそ Charlotte は自分自身を小説に投入することができたのである。

このようにして作者 Charlotte Brontë の分身 Jane Eyre は誕生した。そして Charlotte 自身がヒロインに自己を投入し得たということ、この点こそ、小説 *Jane Eyre* をフェミニズム文学として後の批評家たちに注目させる重要なポイントになったと思われる。すでに述べたように、フェミニストたちが *Jane Eyre* においてまず注目したのはヒロインがステレオタイプを打破しているという点であった。貧しく、身分も低く美しくもない女性というのは、そのまま Charlotte Brontë 自身であった。彼女は当時のヒロインの規格に当てはまらない女性であったのである。そのような自分をいかにして「ヒロイン」とするか、これが小説家 Charlotte Brontë の大きな課題であった。そのために彼女が採った方策が、知的で意志の強い女性の創造であった。従来の基準では魅力的となり得ないものを魅力的にするために、彼女はこれまでとは違う価値観が存在する世界を描いたのである。そして従来の男性中心社会によって形づくられた価値観とは異なる価値観をもった女性を描いている点が、フェミニズム批評家たちによって高く評価されることになったのである。

しかし、Charlotte がそれまでとは異なるまったく新しい価値観を提示した根底には、その価値観だけでは自分をヒロインにすることができないという認識があった。そのために彼女は新たな価値基準を自ら設定する必要がある。すなわち、一見既存の価値観に捉われていないかにみえる彼女独自の価値観の土台には、やはり従来の価値観が存在しているのである。むしろそれに捉われていたからこそ、彼女は躍起になってその価値観に対抗し得る新しい基準を生み出そうとしたのかもしれない。Charlotte がいかに従来の価値観に拘泥していたかは、皮肉なことに Jane が Rochester に人間として二人は対等であると当時の価値観を超越した宣言をしている、まさにそのなかに見出すことができる。

‘ Do you think I am an automaton? — a machine without feelings? and can bear to have my morsel of bread snatched from my lips, and my drop of living water dashed from my cup? Do you think, because I am poor, obscure, plain, and little, I am soulless and heartless? You think wrong!

— I have as much soul as you — and full as much heart! And if God had gifted me with some beauty and much wealth, I should have made it as hard for you to leave me, as it is now for me to leave you. I am not talking to you now through the medium of custom, conventionalities, nor even of mortal flesh: it is my spirit that addresses your spirit; just as if both had passed through the grave, and we stood at God's feet, equal — as we are!’¹⁰

Jane は ‘Do you think, because I am poor, obscure, plain, and little, I am soulless and heartless?’ と問うた後で自らそれが誤った考えであることを指摘している。身分、慣習も超えて人間としての尊厳を謳っている。しかしその直後に彼女が ‘And if God had gifted me with some beauty and

much wealth, I should have made it as hard for you to leave me, as it is now for me to leave you' と述べているのはなぜなのか。二人の愛はやはり外見の美醜や貧富の差を超えられないということなのか。魂の結びつきを主張する彼らの関係において、なぜここでふたたびこの問題が引き合いに出されなければならなかったのであろう。結局 Jane がもっとも気にかけているのはこの点であったのかと窺わせる一言である。一見、彼女は独自の価値観に基づいた主張をしているかに見えるが、心の奥底では従来の社会の慣習を受け入れていることをここで露呈しているといえないであろうか。むしろ受け入れていたからこそ、彼女はそれを必死に否定しなくてはならなかったのである。

Jane がいわゆるダブル・スタンダードをもっていたことは、例えば彼女が主張に反して外見の美しさに対してこだわりをみせているところからも窺い知ることができよう。

It was not my habit to be disregardful of appearance, or careless of the impression I made; on the contrary, I ever wished to look as well as I could, and to please as much as my want of beauty would permit. I sometimes regretted that I was not handsomer: I sometimes wished to have rosy cheeks, a straight nose, and small cherry mouth: I desired to be tall, stately, and finely developed in figure; I felt it a misfortune that I was so little, so pale, and had features so irregular and so marked.¹¹

Jane がふと洩らした容姿へのこだわりは、それを超克して生きようとする彼女の姿勢とは対極をなすものであり、まったく相容れないことのように思われる。しかし実際にはこうしたこだわりがあったからこそ、彼女はそれを克服して生きる方法として自分なりの新しい価値観を模索し打ち立てる必要があったのである。

これは、そのまま作者 Charlotte に当てはまることでもある。彼女の精神はヴィクトリア朝の価値観にしっかりと掬めとられていた。彼女の因習への反抗は、それから自由だったためではなく、逆に縛りつけられていたからこそ行なわれたことである。彼女が Jane のようなヒロインを生み出した背景には、社会の評価する基準に当てはまらない自分自身を、せめて小説のなかで精一杯主張したいという願望があったのであろう。

精神面だけでなく、経済的に自立した女性の生き方についての主張にも同様のことがいえるであろう。生計を立てることにに関してさまざまな問題に直面した Charlotte であったからこそ、彼女が小説で描いた、女性の活動の場を求めるといふ主張は真実味をもって読む者に迫ってくる。しかしこの問題に関しては、実体験を踏まえてはいるがそれと同時に理想もかなり含まれている。Jane が Thornfield で得た家庭教師の地位は現実というよりは理想に近いものを描いているし、特に経済的自立に関しては、物語の結末部分で突然それまで会ったこともない叔父の遺産を相続するというのもやはり不自然である。¹² しかしながらそこには Charlotte が確かに夢み願ったことが描かれている。

敢えて意識することがなかったにせよ、自分自身を描いたこと、これこそが *Jane Eyre* に類いまれな力を与えているのである。新しいタイプのヒロインが魅力的であったこと、女性の生き方に関する主張が熱を帯びていたことも、Charlotte がそこに自分自身を投影していたからであった。*Jane Eyre* がフェミニズム小説として高く評価された要因は、作者 Charlotte Brontë の熱情をこめた自己投影にあるといえるのである。

Ⅲ フェミニズム小説としての限界

以上のように *Jane Eyre* は、特に今世紀の前半、フェミニズム小説として高い評価を受けた。しかしながら作品のなかで Charlotte Brontë が示した考えが果たしてフェミニズム思想として充実したものであったかについては疑問がある。すでに述べたように、Jane の主張はその根底ではヴィクトリア朝の価値観を受け入れていた。だからこそ身分や財産、容姿の美醜に関して小説のなかで取り上げていたのである。もし Charlotte がこうした問題を超越していたならば、彼女はこれに関して自分の作品で言及しようという気さえ起こさなかったであろう。それは彼女自身のなかですでに問題ではないからである。しかし実際にはこの問題に関して Jane は苦悩しており、そこには作者 Charlotte 自身の苦しみを読み取ることができる。

Jane はなぜ苦悩したか。それはすでに述べたように、彼女が当時の社会が求める基準において高い評価を得ることができなかったからである。そこで彼女は自分自身で新しい価値観を創造し、評価の変換を試みた。Jane は既存のヴィクトリア朝の価値観を克服したのではなく、それに代わるものを生み出すことで自分自身を救おうとしたのである。Jane が名門の美女 Blanche を皮肉を込めて描写するとき、そこから聞こえてくるのは身分や容姿の美しさがいかに空しいものであるかを、読者にもそして自分自身にも説き聞かせようとする必死な声である。そして、そこにはそれらに恵まれなかった彼女の悔しさもある。Jane は手の届かないおいしそうな葡萄を見て「なんて酸っぱそうな葡萄だ」と言った Aesop (620?-560? B.C.) の狐と同じことをしているのである。自分が手に入れることのできないものに対して、その悔しさを合理化し、またそうした自分を正当化しようとしている。そこにあるのは「持たざる者」の精一杯の自己主張である。

それゆえ Charlotte が小説のなかで展開しているのはフェミニズム思想というよりは自己主張といった方が適切であるかもしれない。思想と呼ぶには Jane の言動には矛盾が多く一貫していない。しかしそれにもかかわらず彼女の言葉が読む者をとらえるのはなぜか。それは彼女の主張の内容以前に彼女の言葉そのものがもつ力、エネルギーのためであろう。自分が感じたこと、願うこと、そしてときには怒りをも思ったままに体当たりで表現する逞しさが彼女の大きな魅力となっている。*Jane Eyre* がもっていた力は、広範な知識や公正な視点などではなく、作者が自分自身を作品に注ぎ込むようにして描いたその迫力にある。先に引用した Rigby の *Jane Eyre* 批評は酷評として有名であるが、しかしそのなかには Charlotte のこうした執筆態度を言い得ている部分もある。

It [*Jane Eyre*] bears no impress of being written at all, but is poured out rather in the heat and hurry of an instinct, which flows ungovernably on to its object, indifferent by what means it reaches it, and unconscious too.¹³

理性によってではなく、自分の内にある感情を、迸るエネルギーそのままに作品にぶつけていく Charlotte の姿が指摘されている。このエネルギーの強さ、激しさが *Jane Eyre* の生命であるとわたしは思う。自己を思うさま作品にぶつけたこと、これが小説 *Jane Eyre* の成功の秘密であり、それと同時に思想書としては限界であった。

そしてさらに言うならば、*Jane Eyre* で展開されているものは、フェミニズム思想として脆弱であるというばかりでなく、果たしてフェミニズム — 女性に関する思想 — であるのかとい

う点にも疑問がある。*Jane Eyre*には確かに女性の生き方や社会における位置づけへの問いかけなどが多く描かれている。しかしそれはこれまで述べてきたように、作者 Charlotte Bronte が女性であり、彼女が経験し感じたことを作品に描き込んだことから生じた当然の結果であり、Charlotte 自身女性のことだけを念頭において小説を執筆したとは思えない。彼女の主張は女性である自分自身を起点としてはいる。しかしときとして男性、女性といった性別を超えていること、すなわち人間全体を対象としてなされていることがある。次の Jane の言葉を見てみよう。

“... I believe he [Rochester] is of mine; — I am sure he is, — I feel akin to him, — I understand the language of his countenance and movements: though rank and wealth sever us widely, I have something in my brain and heart, in my blood and nerves, that assimilates me mentally to him Did I say, a few days since, that I had nothing to do with him but to receive my salary at his hands? Did I forbid myself to think of him in any other light than as a paymaster? Blasphemy against nature! Every good, true, vigorous feeling I have, gathers impulsively round him I know I must conceal my sentiments: I must smother hope; I must remember that he cannot care much for me For when I say that I am of his kind, I do not mean that I have his force to influence, and his spell to attract: I mean only that I have certain tastes and feelings in common with him. I must, then, repeat continually that we are for ever sundered: — and yet , while I breathe and think, I must love him.”¹⁴

ここに描かれているのは単に女性としての苦悩ではない。地位や富といった社会が設定した価値観が、愛するという人間としての自然な感情を阻み得ることへの抗議と苦悩である。ここで表現されているのは女性としての主張ではなく、人間としての主張である。これを女性の意見としてのみ捉えるのはむしろ Charlotte の本来の意図を歪め狭めてしまうことになるであろう。彼女は確かに女性について多くを語った。しかしそれは女性のみを対象としたフェミニズムというよりは、むしろ人間のあり方に干渉するものに対して抗議した、ヒューマニズムに近いものとして捉えるべきであろう。

Jane の主張がフェミニズム思想として成立するのに脆弱であることはすでに述べた。だが、思想としての浅薄さ以上に彼女が抱えていた最大の問題はほかにある。それは彼女が、社会が求める基準に満たずに苦しんでいることではなく、その事実を自ら認めようとはせず、もう一つ新たな基準を作ってその補いをしようとしたこと、すなわちダブル・スタンダードを設定していることに彼女自身が気づいていないということである。誤った土台のうえに構築されたものはいずれ歪みを生じてくる。彼女の主張の矛盾や思想としての脆弱さはここに起因している。第12章であれほど女性の活動の場を求めていた彼女が、なぜ作品の結末では森のなかの家に籠もって夫の世話をするだけの生活に満足しているのか。自立した生活を望みながら、なぜ実際に自活していた Lowood での教師生活、Rochester が現われる前の Thornfield での家庭教師生活、Morton での教師生活に満足することができなかったのか。Jane の主張と行動との食い違いは *Jane Eyre* 研究の深まりとともに次々と指摘され、1940年代のような、自立した女性の生き方を描いた理想の小説としての「フェミニズム神話」は崩れ去ってしまった。しかしながら、こうした事実の指摘は1960年代後半以降本格化したフェミニズム批評にとってはむしろ都合

がよかった。あるいは、このときのフェミニズム運動がそれまでの神話を突き崩していったという方が正確であろうか。1960年代後半以降のフェミニズムは、Jane が示した限界に女性の現実を見るという形で研究を深めていったからである。

IV 女性の現実

今世紀前半のフェミニズム批評が、*Jane Eyre* をフェミニズムの理想書として礼賛することで発達したのとは対照的に、20世紀後半に全盛を極めたフェミニズム運動は、*Jane Eyre* に表われたさまざまな矛盾や限界に焦点を当て、そこに女性の現実を読み取っていった。それまでのように思想としての完璧さではなく、その綻び、矛盾を研究対象として分析した。研究の方向をこのように変え得たのは、S. Freud (1856-1939) の精神分析学による影響が大きい。彼なくしては今世紀の後半、これほどまでにフェミニズム批評が流行したかどうか分からない。またもしフェミニズム批評が盛んになっていたとしても、その方向はまったく違うものになっていたことであろう。それほどに彼の指摘した無意識という領域は、文学研究においても重要な位置を占めるのである。無意識のうちふと口にされた言葉のなかに内面の心理を読み取るという彼の方法は、その言葉の整合性を問題にしない。そこに表わされた心理状態こそ問題なのである。*Jane Eyre* に関しても、主人公が示す思想と行動の矛盾のなかに、彼女がそしてさらには女性全体が直面していた現実を読み取るというかたちで研究が進められていった。

Jane の分身としての Bertha Mason の重要性や男性と女性との異性間の抗争など、深層心理に着目したことで初めて可能となった解釈が次々に発表された。しかしここでわたしはむしろ、*Jane Eyre* のフェミニズム批評が女性の理想を描いたものから現実を描いたものへと、短期間のうちにまったく逆の方向へ進み得た事実の方に注目したい。研究対象である *Jane Eyre* 自体に変化があったわけではない。この方向転換は Freud の性心理学を導入したフェミニズム批評そのものの方向転換であった。批評方法のこの急激な変化に *Jane Eyre* が耐え得たという事実は、研究方法の如何に関わらずこの小説が研究対象として成立し得る、多面的な奥深さをもった作品であるということを証明するであろう。*Jane Eyre* は主人公も作者も女性であり、確かにフェミニズム研究には適した構造をもっていた。しかし今世紀前半と後半の研究方法の急激な変化を考慮に入れると、*Jane Eyre* そのものがフェミニズム批評に合致したというよりも、時代がこの作品をそのように読んだといった方が正確であるかもしれない。まったく違う角度から当てられた光のなかでも、*Jane Eyre* は動じることなくやはり独立した文学作品としてさまざまなアプローチを許し得たのである。

V フェミニズムの終焉

1960年代後半以降に本格化したフェミニズム批評は、*Jane Eyre* 研究に豊かな実りをもたらした。フェミニズム批評は現在も *Jane Eyre* 研究において中心的な位置を占めているが、しかしその運動は徐々に終息に向かっている。それは時代の流れが必然的にもたらす変化でもあるが、それとは別にフェミニズム思想そのもののなかにもそれを終焉に向かわせる要因があったように思われる。

フェミニズムは本来、社会や家庭において男性と比較して著しく規制の多かった女性の立場を、男女間の不均衡をなくし人間として対等な地位を獲得するための思想、運動であった。イ

ギリスでは Mary Wollstonecraft (1759-97) が執筆した *A Vindication of The Rights of Woman* (1792) がこうした運動の暁鐘とされている。同じ18世紀後半には Ann Radcliffe (1764-1823)、Maria Edgeworth (1767-1849) らが登場し、女性作家がゴシック・ロマンス、児童書、感傷小説などで活躍するようになる。その後19世紀に入ると Jane Austen (1775-1817) や Charlotte を始めとする Brontë 姉妹 (Emily 1818-48, Anne 1820-49)、George Eliot (Mary Ann Evans, 1819-80) などの女性作家が次々と現われた。19世紀も後半になると全国婦人参政権協会の設立(1867年)や婦人保護共済同盟の設立(1874年)などにより女性解放運動は少しずつ進展していった。この傾向は20世紀に入ってからも続き、特に1960年代後半からは世界的に女性解放運動の気運が高まった。しかしそれとともに発展したフェミニズム批評は、女性の文学を新しい視点で再吟味するという批評活動が、ともすると行き過ぎる傾向を見せ始めた。「女性であること」に強い関心を寄せるあまり、その対極に位置するものとして男性を敵対視し、両性間に抗争の図式を成立させてしまったのである。これは *Jane Eyre* 研究においても顕著で、例えば Charles Burkhart は Jane と Rochester の関係にもそうした対立を読み取り、Jane をその抗争における勝者に位置づけている。¹⁵

Jane has remained the same in temperament, moral code, and self-pride as she was ten years ago at Gateshead; but her lover [Rochester] has changed. His pride has been brought low, his physicality damaged by the loss of a hand and an eye, so that he is now reduced to the same level, or beneath it, of the “poor and obscure” creature he loves. It is debatable whether he has been maimed for attempted bigamy and other past misconduct or for having treated Jane as in any way inferior to himself. The almost ferocious ethic of Jane, her sense of duty, her Christian self-respect, are entirely victorious — Rochester now talks about God a good deal. She has brought him firmly into line, morally as well as sexually.¹⁶

本来、人間として男性と対等であり得ることを目指していたはずのフェミニズムは、対等であることを超えて女性が男性の上位に位置することを主張し始めた。性別による不当な差別を廃止するための思想であったものが、両性の平等という本来の目的・意図に反し、それを自ら破壊する方向へ向かっている。性差別に反対していたものが、逆に差別を生み出すという矛盾した構造が出来しているのである。

こうしたフェミニズムの行き過ぎた傾向に対して警告を発している批評家もいる。例えば中岡洋氏は次のように述べている。

ジェイン・エアが、男女は神の前で平等だ、と主張するとき、それはフェミニズムの精神そのものである。そういう精神がこの作品解釈の重要な鍵になり得ることを見逃してはならない。……一概にフェミニズムといっても、さまざまな主張が混在しているのが現状であるが、わたしの解釈では「基本的人権」において男女平等のみならず、すべての人間は平等であるという思想に立って、ジェインの主張は男女差別の排除を要求するものとして受け止め、性差を強調して男女の逆差別を生来せしめるようなものではないということである。そして単なる女性の権利の主張は自明のことであって、ジェインが主張し要求しているのは

「人間の尊厳」であり、男性も女性も神の前に平等だということである。¹⁷

現在のフェミニズムは本来目指したコースを逸脱しているのではないか。もちろん現在においては、完全に女性の権利が守られる社会が実現されているとはいえない。しかし行き過ぎた女権主張を聞いていると疑問を抱かざるを得ない。女性さえ優位に立てばよいというのは、男女が入れ替わるだけであって、フェミニズム運動以前の社会の在り方と変わらない状況を作り出しているにすぎない。被支配者の立場にあった者が支配者の立場に取って代わろうとしているだけであり、本来理想としていたはずの男女平等、人間として等しい者同志が協力して作っていく社会の実現にはほど遠い。それどころか、男女を入れ替えただけで、運動以前の社会に逆戻りしようとしているかのようである。Jane が、そして Charlotte が意図していたのがこのようなことだったはずはないのである。

人間として男性と対等な存在であることを目指したフェミニズム思想であるが、しかしこの思想は構造そのものに矛盾を内包していた。フェミニズムは女性についての思想であるが、その基本に「女性は男性とは違う」という前提があってこそ成立する思想である。性差の存在を前提とした思想がその差の否定、撤廃を求めて進展して行ったとき、そこには自ずとひずみが生じるであろう。両性の平等を訴えるはずのフェミニズムが、その運動が発展した結果、今日のように逆に性差を際立たせる方向に向かってしまっているのは、あるいはこうした構造的な矛盾のせいであったかもしれない。

フェミニズムは社会や慣習によって歪められた女性たちの人間としての権利を回復、拡張するための運動であり、特に今世紀に入ってから女性の地位向上のために果たした役割は非常に大きい。Jane Eyre 研究においてもフェミニズム批評は Bertha Mason や Red Room のまったく新しい解釈などかつてない成果をもたらした。しかし思想そのものの向かう方向が変わりつつある昨今、フェミニズム批評の役割はすでに終焉を迎えようとしていることができるのではないだろうか。事実、フェミニズム批評はポスト・コロニアリズムなど他のジャンルの研究方法と結びつき、徐々に変身を遂げようとしている。20 世紀の後半を華々しく彩り、Jane Eyre 研究にさまざまな成果をもたらしたフェミニズムは、いままさに終焉を迎え、Jane Eyre 批評もまた 21 世紀に向かって新たな時代を迎えようとしているのである。

注

¹ [Elizabeth Rigby] An unsigned review, *Quarterly Review* (December 1848), lxxxiv.

² Charlotte Brontë, *Jane Eyre*. Ed. by Jane Jack and Margaret Smith (Oxford at the Clarendon Press, 1975), pp. 132-3.

³ *Jane Eyre* 出版当初の書評にみられるフェミニズム的指摘に関しては拙論「*Jane Eyre* の初期批評とフェミニズム」(『流通経済大学論集』Vol. 30, No. 3, 1996. 1, pp. 30-40) を参照のこと。

⁴ Elizabeth Bowen, *English Novelists*. (William Collins of London, 1942), p. 34. Phyllis Bentley, "Jane Eyre" In *The Brontës*. (London: Home & Van Thal Ltd., 1947), p. 68.

⁵ 川本静子著『ガヴァネス(女家庭教師)―ヴィクトリア朝の〈余った女〉たち』中公新書 1204 (東京、中央公論社、1994 年) p. iv.

⁶ 前掲書、p. iii.

⁷ Charlotte Brontë's letter to Ellen Nussey, dated April 1st, 1843.

⁸ Charlotte Brontë, *Shirley*. Ed. by Herbert Rosengarten and Margaret Smith (Oxford at the Clarendon Press,

- 1979), p 194.
- ⁹ Harriet Martineau, "Death of Currer Bell" *Daily News*, April, 1855.
- ¹⁰ *Jane Eyre*, p 318.
- ¹¹ *Jane Eyre*, pp 118-9
- ¹² Norman Collinsはこの遺産相続に関して、経済的な自立が女性の自立を可能にするとしてフェミニズムの視点で初めて積極的な読み方を示した。("The Independent Brontes" In *The Facts of Fiction*. London: Victor Gollancz Ltd, 1932, pp 181-2)しかしながら、物語の展開の唐突さに加えて、このエピソードが Jane 個人とは関わりなく外部からもたらされたものであること、そこには彼女自身の働きかけは何もなく、伝統的なお伽話のヒロインたちが王子や親切な妖精によって救ってもらうという「受動的な」解決方法と変わりがないという点が、Jane が主張している生き方との食い違いを感じさせる。
- ¹³ Rigby, *Quarterly Review*
- ¹⁴ *Jane Eyre*, pp. 219-20
- ¹⁵ 次に挙げる Burkhart のほか *Jane Eyre* にこのような男女の抗争を読み取った批評家には Patricia Meyer Spacks (*The Female Imagination: A literary and psychological investigation of women's writing*. 1972 pp 66-7, 71)、Helen Moglen (*Charlotte Brontë: The Self Conceved*. 1976 p 142)、Margaret Howard Blom (*Charlotte Brontë* 1977 pp. 84-7)そして Barbara Hill Rigney (*Madness and Sexual Politics in the Feminist Novel: Studies in Brontë, Woolf, Lessing, and Atwood*. 1978 pp. 31-2) などがいる。
- ¹⁶ Charles Burkhart "Jane Eyre: The Art of the Adolescent" In *Charlotte Brontë: A Psychosexual Study of Her Novels*. (London: Victor Gollancz Ltd, 1973) p 75
- ¹⁷ 中岡洋 『『ジェイン・エア』はフェミニズムで読みきれぬか』中岡洋編著 『『ジェイン・エア』を読む』(開文社、1995年)、p 135.